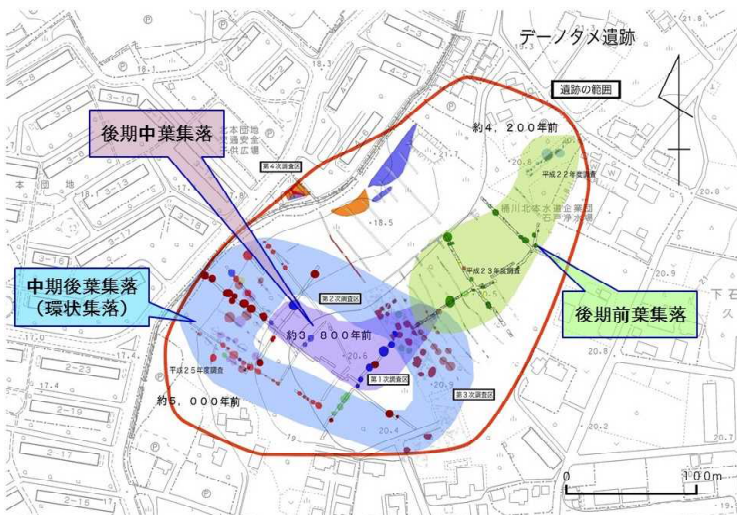


デーノタメ遺跡

デーノタメ遺跡ではこれまで4回の発掘調査と2回の追加調査が行われ、縄文時代中期（約5,000年前）の環状集落と、その東側には縄文時代後期（約3,800年前）の集落が確認されている。

同一の場所で縄文時代中期から後期にわたって集落が長期間継続しており、遺跡としてほぼ完全な形で保存されている貴重な文化財である。

デーノタメの名は湧水による池に由来する。この湧水は縄文時代の水場として利用されたと考えられ、低湿地遺跡が確認されている。



縄文時代中期の環状集落は、高井遺跡と同様、勝坂式土器の時代にはじまり、加曾利EⅢ式土器を出土する段階まで続く。



第1次調査 第8号住居跡
勝坂式土器



クルミ塚

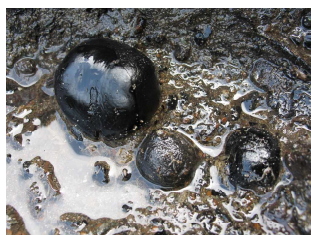


漆塗り土器（縄文時代中期）

【低湿地遺跡としてのデーノタメ遺跡】

水場の遺跡からは、鮮やかに漆を塗られた土器や木製品が発見されるとともに、クルミ塚とともいふべき地点からは、縄文人が利用した植物の種が豊富に見つ

かっている。このことから、江川低地の縄文人が川筋をクルミ林に変え、ムラのまわりの森からはクリやトチなどの木の実を集め、さらにはニワトコ・コウゾ・ヤマブドウ・サルナシなどの果実類（ベリー類）を利用していたことを知ることができる。



トチの実出土状態



ニワトコの核

デーノタメ遺跡は、江川流域の縄文人が多様な植物利用の文化をもっていたことを教えてくれる。

勝坂式土器にダイズ属の種子の圧痕が見つかるなど、農耕の存在をおもわせる発見もあり、今後の研究に期待したい。

企画展『江川が結ぶ縄文のムラ ー高井・諏訪野・デーノタメー』

- 資料出品協力（著作物の提供を含む）

埼玉県立さきたま史跡の博物館

北本市教育委員会（文化財保護課）

桶川市教育委員会（生涯学習文化財課）

- 協力者

岡村道雄 大工原 豊 金子直行 渡辺清志 野中 仁

磯野治司 齊藤成元 坂田敏行 今井正文

（以上順不同 敬称略）

桶川市歴史民俗資料館

館長 滝瀬利二

事業担当 紅谷有美



桶川市歴史民俗資料館企画展示

江川が結ぶ縄文のムラ ー高井・諏訪野・デーノタメー

展示期間

平成29年3月5日（日）～5月7日（日）



物語のはじまり

江川の谷をめぐる縄文のムラの物語は、昭和43年（1968）5月に高井遺跡の調査が行われたことに始まります。

かつての江川の流域は、川に沿う低地には水田、その両岸の台地には麦やサツマイモの畑と雑木林が広がっていました。日出谷地区の高井のあたりは深い落葉樹の森に覆われ、遺跡は静かに眠っていました。

昭和40年代に至ると、桶川市では、首都近郊のベッドタウンとして新たな人々を迎えるなかで、住宅地の開発が進んでいきました。

この時、発掘調査が行われた高井遺跡は、5,000年前にこの地に森の恵みを受けて大きなムラを営んだ縄文時代の人びとの暮らしを私たちに伝えてくれることになったのです。

桶川市歴史民俗資料館

桶川市大字川田谷4405-4 川田谷生涯学習センター内
Tel 048-786-4030 E-mail rekishi@city.okegawa.lg.jp



高井・諏訪野・デーノタメ

江川の谷をめぐり、高井遺跡、諏訪野遺跡、デーノタメ遺跡といった大規模な集落遺跡が営まれたのは縄文時代中期である。自然の恵みをもとに成り立っていた縄文時代の生活は、気候変動の影響を強く受ける。今から約5,000年前、縄文時代中期に至ると気候の冷涼化が進んで海は退き、縄文人は新たな自然環境への適応を迫られることになる。

縄文時代中期の中ごろ、江川低地に沿う台地に、勝坂式土器を携えた人々がムラを作り始める。

勝坂式土器は、中部高地から関東地方南西部など、内陸の落葉広葉樹の森がひろがる地域で使われた土器である。

森の民である縄文時代中期の人々が江川の谷をめぐる台地に拓いた村が「高井遺跡」、「諏訪野遺跡」そして「デーノタメ遺跡」である。

諏訪野遺跡

諏訪野遺跡は、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）を建設するための事前調査として、平成19年（2007）5月から翌年の9月にかけて発掘調査が行われた。

遺跡からは、縄文時代中期（約5,000年前）の人々が暮らしていたムラの跡が姿を現し、79軒の竪穴住居跡が発見されている。

諏訪野遺跡のムラは、竪穴住居が広場をとりかこむように円形に並ぶ「環状集落」であると考えられ、その規模はさしわたし180mに達する。

【環状集落の成立】

縄文時代中期の関東地方では、発見される竪穴住居跡の数が著しく増加し、高い人口密度であったといわれている。

諏訪野遺跡の発掘調査においては加曾利EⅠ式土器を出土した竪穴住居跡がもっとも多く、この時期に広場を中において、環状に竪穴住居跡がめぐるムラの形ができあがっている。

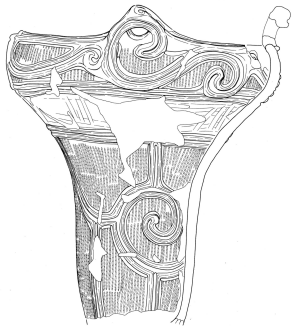
諏訪野遺跡では、加曾利EⅡ式土器に推移する中で集落は廃村となっている。



第28号住居跡



第51号住居跡 炉に埋められた土器



第28号住居跡出土
加曾利EⅠ（新）式土器



高井遺跡



【炉体土器】

諏訪野遺跡において環状のムラが確立したところ、縄文時代の人々は、深く土を掘り、竪穴住居を構えた。

その床面に設けられた炉には、しばしば立派な深鉢形土器が埋め込まれていた。

【行き交う土器 ー加曾利EⅠ式土器の誕生ー】

縄文時代中期の中ごろ、諏訪野遺跡に暮らした人々が用いた土器は、豊かな装飾をもつ勝坂式土器から、明快な文様構成をもち縄文時代中期後半を通じて関東地方で用いられた加曾利E式土器へと移り変わる段階にあった。

加曾利EⅠ式土器が誕生しようとする段階の諏訪野遺跡の住居跡からは、関東一円の多様な系譜をもつ土器が発見されている。

この活発な交流が、その後の関東地方において標準となる加曾利E式土器の文化を生み出し、諏訪野遺跡や高井遺跡の環状集落も同時に最盛期を迎える。



第25・27号住居跡 勝坂系



第26号住居跡 勝坂系



第26号住居跡 中峠（なかびょう）系



第13号住居跡 東関東系

高井遺跡

桶川市大字下日出谷字高井と大字上日出谷字原新田に所在する高井遺跡は、昭和43年（1968）に桶川市立西小学校の建設に先だって行われた第1次発掘調査以来、12回の調査によって115軒の竪穴住居跡が見つかり、遺跡の全容をほぼ知ることができる遺跡である。

桶川市教育委員会では、市街化区域にあって消滅の危機にあった高井遺跡について小規模な調査を継続し、昭和55年（1980）に行われた第3次調査によって、高井遺跡が環状に竪穴住居がならぶ大規模な縄文のムラであることを確認した。

高井遺跡は、諏訪野遺跡とほぼ同時に始まるが、その廃村後も縄文時代中期の終わり近くまで続き、約500年にわたって縄文人の暮らしの場となっていた。

【土器に見る高井遺跡の終末】

高井遺跡では、加曾利EⅡ～EⅢ式土器の段階まで、集落の規模を縮小しながらも遺跡が営まれている。

また、諏訪野遺跡に見られなかった弧線が連なる文様を描く連弧文（れんこもん）系土器が数多く発見され、中部高地と共通する曾利式土器が伴うようになる。

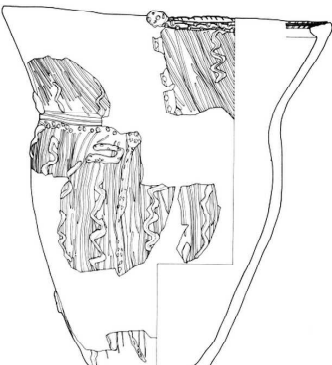
高井遺跡の終末期にあたる2次調査第2号住居跡出土の深鉢形土器には、加曾利E式土器を飾った渦巻文様はすでになく、縄文時代中期から後期に向けて、新たな土器文化の登場を予感させる。



第3次調査 第10号住居跡



第3次調査
第5号住居跡内土壇



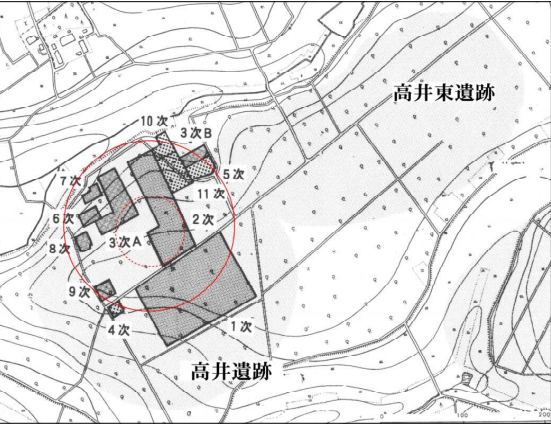
第7次調査 第12号住居跡



第3次調査 第10号住居跡



第2次調査 第2号住居跡



高井遺跡発掘調査配置図



第3次発掘調査風景